

# 探訪・学びのフロンティア

中間 真一 HRI 主席研究員

## ゆとり教育10年という節目

1989年、「てら子屋」のスタートと時を同じくして、生きる力の育成とゆとりある教育をねらいとした学習指導要領が告示された。そこでは、自ら学び自ら考える力の育成、教育内容の厳選と基礎・基本の確実な定着、特色ある教育・学校づくりが目指されていた。いわゆる「ゆとり教育」の幕開けだった。

## 生きる力が、学力が

それから10年を経て、本年2月に新たな学習指導要領改訂案が発表された。引き続き「生きる力」の育成が掲げられているものの、この間止むことのなかった「ゆとり」か「学力」か？という議論の争点となった学力低下批判を受け、授業時間を増やして

確かな学力を身につけることが目指されている。

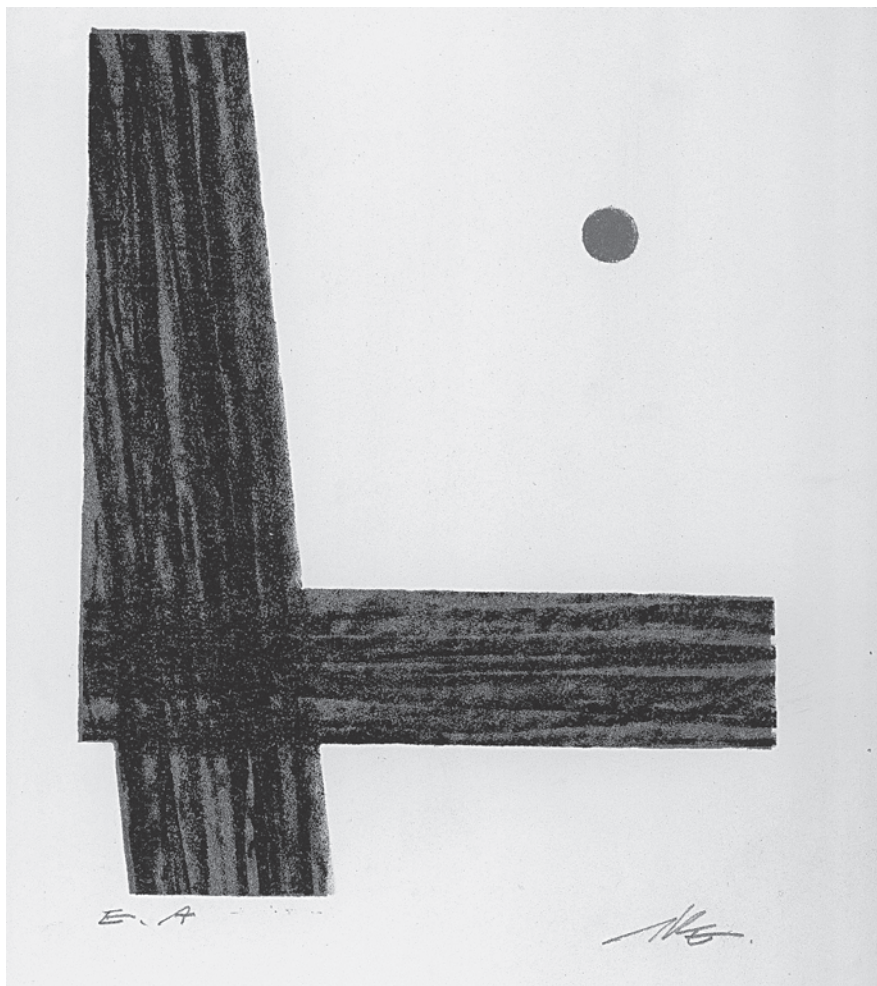
確かにこの10年、「てら子屋」の活動を通じて、自分の子どもたちが通う小学校の様子からも、公教育の混乱ぶりは増す一方だった。もちろん、幸運にも優れた先生にめぐり会えたり、優れた教育がなされる学校に進めたりする子どももいるわけだが、人生の中で大切な子ども期、やり直しできない子ども時代の小中学校での学びは、公教育であり義務教育である。誰もが安心して、良い教育を受けられなくてはならない。

そして、もちろん生きる力と学力は別ものではなく、同じ学びの場から獲得し得るものだ。と確信している。それが「てら子屋」の教育への考え方だ。学力低下騒ぎの契機をつくったPISA調査が問うている「リテラシー」という概念も、まさに生きる力となる知識であり、知恵の獲得を指している。

## なぜ「てら子屋」に集ったのか

「なぜ、ウチの子は、限られたチャンスしかない『てら子屋』でなくてはいけないのでしょうか？ 毎日通っている学校で、なぜこんなに興奮して楽しく学べないのでしょうか？」「てら子屋」の参加者の母親から、こんな一言を投げられたことがある。

アンケートの中にも、「日常の中で、私にとっては関係なさそうに見えることや話なのに、『てら子屋』で知ったこと、体験した」と、聞いたことを自然に関連づけて自分の興味につなげ、もと知ろうとしている子どもの姿に驚かされます」という内容があった。これは、自慢話のつもりで紹介しているのではない。この一言の裏側には、現状の公教育の本質的な問題が潜んでいると思えるのだ。



## 学校・先生の「眼力」と「胆力」

では、今の公教育システムの中で、何ができて何ができないのか、何が足りていて、何が足りないのか。「てら子屋」という、まったく学校教育から離れた実験的な学びの場を、横に並べたことによって見えてくることもある。

私の感覚から言えば、個々の子どもが学ぶ「見通し」をもつて、焦らずに「見守り」、必要なことを「見抜き」、「ここぞ」というタイミングでは「見せる」ことができる、先生と学

校の「眼」のよさと「胆」の太さが決め手となるはずだ。もちろん、それは理想の状態だ。そして、そのような学校や先生、さらには子どもたちや両親の暴盤が必要となってくるのは「自律」であり、その上での「信頼」ということである。『モンスター・ペアレント』や「フリースク先生」の中では、良い遊びの場は得難いのが当然だ。

## 学校を開き、学びのフロンティアを拓く

しかし、日本中の学校や先生が一斉にそのように変身できるだろうか。それは困難だ。そんなスーパーティーチャーを期待して学校に任せてしまうのは無責任でもある。しかし、子どもたちの学びの場を改善することは必要不可欠な急務だ。それならば、学校の外に目を向けてはどうだろうか。そこに、学びのフロンティアが見えてくるはずだ。

これまでも、本誌では学校外の学びの場を紹介してきたが、今回は「学校」つまり公教育の可能性と希望も十分にあることも紹介する。そのために、伝統のまちでありながら、じつは常に時代の先端を走り続ける「京都」の公教育を取り上げた。そこには、地域の力で子どもたちの学びを支えてきた歴史と、たゆまぬ改善の姿が見てとれる。

さらに、自然からの学び、アートからの学び、科学からの学び、仕事からの学びなど、なかなか学校の内側だけではかなえられない豊かな学びも、一歩学校の外に出れば、素晴らしい場があることを紹介した。それぞれ、NPO法人、企業、商工団体と、高い専門性のもとに場づくりに取り組んでいるからこそ、質の高い活動が実現している。これらの学びのフロンティアの様子から、未来への学びの場を見渡し、見抜いていただければ幸いだ。

# 次代を拓くための公教育 教育先端都市「京都」の歴史から

みやこ  
都の持つバイオ文化―歴史都市かつ未来開拓都市としての京都―

多くの人は、京都のイメージとして「伝統」「歴史」「文化」「寺院」といった言葉を思い浮かべるだろう。しかし、「都」とは、時代の先駆けを生み出すシステムでもあった。新たな文化は、京の都に発して、全国津々浦々に伝播していった。明治維新による遷都以降、文化発信地が東京に移ってしまったことは否めないが、いまだ京都は世界の人々からもバイオニアのイメージを持たれている。HRIが2007年12月にヨーロッパ地域で実施した調査結果では、ヨーロッパの人々の京都イメージとして、「京都議定書」がトップにランキングされていた。いまや地球規模の先駆けとしてのポジションを、「京都」は獲得しているといえよう。

## 教育の先端を走る―知恵を生み続けるためのまちの営み―

そして、このことは人の知恵こそが京の都の最大の資源であり、競争優位の源泉であり続けてきたことをも示唆している。すなわち、「人を育てる」ということが、常にバイオニアの頂点にあり続けるために最も重要な「まちの営み」であったということだ。

その歴史に培われてきた自負が、京都の教育の遺伝子として継承され、今も明らかに息づいている。その一つが、保護者や地域の住民も一定の権限と責任を持って学校運営に参画する「学校運営協議会制度（コミュニティスクール）」だ。現在、全国で195校が文科省の指定校となっているが、うち60校が京都市内の学校である（2008年2月現在）。このほかにも、全国から「京都モデル」と呼ばれるような未来志向の教育施策を展開し続け、日本の公教育の先鞭をつけ、牽引している。「先端教育のまち・京都」は、今なお健在なのだ。

## 1200年前の教育の理想―空海が構想した理想の学校の未来性―

その教育の先進性の端緒は、1200年前の空海（弘法大師）の教育にさかのぼって見いだせる。遣唐使として唐に渡り、留学していた空海は、貧富の差にかかわらず、幼い子どもたちにも届く唐の学校教育の充実ぶりこそ、多くの優れた人材を輩出する源泉であり、国の豊かさを支えている最大の要因だと感じ取った。そして、帰国後に儒教、道教、仏教の三教の総合的な教育を行う学校設立に奔走し、「綜藝種智院」という学校を京都に開いた。その開設に寄せて空海は、教育に必要な四つの条件を挙げた。





一、仁(他者への思いやり)を尊ぶ環境で学べること

二、あらゆる学問を総合的に教育し、偏りのない生きた知恵を体得できること

三、多くの立派な教師を得、身分や貧富の差にかわりなく、適性や能力に応じた指導を得られること

四、教師と学生の生活の安定を図れるよう、多くの理解と支援を求められること

要約すると、このような意味の四項目だ。これらは、1200年という時の経過をまったく感じさせず、現在そして未来へも活かしたい教育の価値ではなからうか。

### 教育の力を信じるまち―都の危機を教育で克服する―

一方、都であり続けてきた京都にとって、明治維新による遷都は、青天の霹靂<sup>へきれき</sup>であり、最大の危機であった。蛤御門の変など、激しい混乱の中で、洛中は半数の家が焼かれ、世帯数は約7割に減ったという。そのような危機から立ち上がるために、京都のまちは、ここでも将来のまちの担い手を育てる「教育」を重視した。

京都は室町時代、10年間に及ぶ応仁の乱で壊滅的狀況に陥った。そのどん底からの復興に、住民たちが知恵と力を合わせて取り組んでいる。それが「町組」と呼ばれる自治組織の始まりである。その後も、まちの暮らしを守る自治組織として続いてきたが、明治維新の危機からの復興の核を担ったのも、この「町組」だった。ここで、京都の町衆は、「子どもが育てば、京都の将来は明るい」という信念のもと、知恵を出し合い、汗をかき合い、さらに、<sup>かまど</sup>竈のある家はその数に応じてお金を出し合って、すべての町組単位に64の学校を設立し運営し始めたのだ。このころ、各町組には番号が付され「番組」と呼ばれるようになっていたことから、これらの学校は「番組小学校」と呼ばれ、日本の学区制小学校の端緒となったのである。

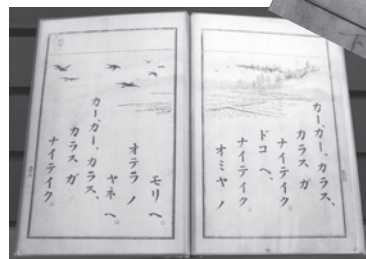
福澤諭吉は、当時の番組小学校の様子を「理想とする学校づくりが町衆の力で行われている」と『京都學校記』の中で絶賛して記しており、その後の近代日本の公教育展開につながっている。

### 公教育の未来への希望―「竈金の精神」というまちの遺伝子―

番組小学校から学ぶ点は数多いが、中でも「竈金の精神」は、その後も脈々と京都の教育の遺伝子として引き継がれてきた価値観だ。まちで子どもを育てるために、学校を設立し運営するための原資を、子どもが無にかかわらず、経済的なゆとりを表す「竈の数」に応じて募り、自分たちのまち全体で子どもを育てようとする考え方だ。まさに公教育の精神の原点といえるだろう。

そして、大きな時代の変わり目に立つ現在、京都では第三の教育改革と位置づけて、「ひとづくりこそ、未来へのまちづくり」という確固たる価値観のもとに、次々と新たな施策を展開し成果を上げつつある。知恵のまち・京都の教育は、先端を走り続け、改善を重ね続けている。公教育の再生に希望が持てそうだ。

文・中間 真一



#### 〈京都市学校歴史博物館にて撮影〉

当博物館は、番組小学校の創設に関する資料をはじめ、京都市の学校に遺された教科書や教材・教具などの教育資料、また卒業生などが学校に寄贈した数々の美術工芸品を収集・保存して展示する施設として、平成10年に開館。



# ひとづくりは、 未来へのまちづくり

京都市長（前・京都市教育長）

門川 大作さん

聞き手 中間 真一 HRI 主席研究員



## 立ち向かう楽観主義

**中間** 私たちHRIでは、豊かな未来社会を描くための課題を探っています。これまで、いろいろと調査や研究をしてきましたが、やはり「子どもたちの教

育」の充実こそ、最大の課題ではないかと感じています。どんな問題に直面しても、自分で考え、生き抜くことができる力を備えた子どもを育てれば、自ずと未来は明るく展望できる。私はそう考えているのですが、長年教育現場にかかわって、問題を解決されてきた門川さんにとつて、そんな考え方は少し楽観的過ぎるでしょうか。

**門川** 私がよく使う言葉に「立ち向かう楽観主義」というのがあります。明治維新のとき、日本のリーダーたちは、欧米列強との国力の違いに愕然とした。しかし頑張れば、日本人も欧米に肩を並べられる国をつくれると考え、行動しました。

都の地位を失った京都人も「まちづくりは人づくりから」と、子どもさえしっかり育てれば未来は明るいと考えて行動しました。行動すれば必ず道は開けます。私のモットーは、「行動する、困難に立ち向かう楽観主義」です。悲観主義からは何も生まれません。楽観主義というのは、今の時代にとっても大事です。

**中間** 戦後の日本の公教育は、社会変化の中で翻弄されてきた歴史があります。しかし、そう

した中でも京都の教育は常に先駆けを担ってきたように見えます。一つにはリーダーシップの存在があると思うのですが、もう一つには長い歴史の積み重ねの中で、未来を見通す力が育まれてきたのではないかと感じています。その京都市で、門川さんは教育のかじ取り役をされてきたわけですが、そうした歴史の流れをどのように受けとめていますか。

**門川** 京都には応仁の乱以来、町衆が自治の精神で地域のまちづくりを担ってきた歴史があります。京都の教育を語る上で欠かせないのは、明治維新のときに町衆が自分たちでお金を出し合い、学校づくりに取り組んだことです。洛中の半分以上が焼け、京都人の誇りであった都の地位を失い、多くの人間が東京へ移ったとき、お上の力を借りずに子どもを育てる地域の学校を明治2年に日本で最初につくった。

幕末の慶応3年に、「貧しい家の子は寺子屋に行けない。だから授業料を取らず、教材や教具もきちんと揃えた学校が制度として必要だ」という内容の建白書を奉行所に出した人がいま



教育改革の中心を担ってきたのが「教育改革推進会議」。平成17年にはその提言をもとに、地域ぐるみで教育の充実を目指す「共同宣言」が行われた。



「みやこ子ども土曜塾」は、「まち全体を学びと育ちの場に」「大人みんなが先生」をキーワードに、市民ぐるみで取り組んでいる学びの場だ。



京都市では約1万5,000人が「学校支援ボランティア」として活躍。専門的な技能や知識を持つ人も多く、中にはゲストティーチャーとして授業を行う人も。

した。武士でもお坊さんでもない、町の学者のような人です。もちろん奉行所は完全に無視しました。ところが、その建白書は明治になって公教育を整備する過程で活用されるのです。京都にはそういう先見性を持ったすごい人がいました。

西陣織物工業組合の理事長で、全国の伝統的工芸品産業振興協会の会長をされている渡邊隆夫さんが面白い話をされています。明治維新以降、日本が外貨を獲得する主産業になったのが絹織物ですが、絹をとるために使う蚕は非常に難しい生き物で、湿度、温度、明るさなどをきちんと管理しないと、いい繭ができない。日本人がどうしてできたかという、そういう細かい

ノウハウを書いた文書を全国津々浦々のお百姓さんが読めたからなんです。当時、日本の識字率は世界でもずば抜けて高く、かつ勤勉でチームワークが良かった。つまり、江戸時代から庶民の教育をきちっと行ってきたことが、日本を豊かな国にした原動力だったのです。

ところが、行政が学校経営に乗り出していく過程で、日本人は完璧な学校をつくり過ぎた

（笑）。特に戦後は、子どものしつけに至るまで、学校がすべてを担うようになった。できるはずがないことまで学校が引き受けた。あるいは学校に押しつけてきた。それがさまざまな問題を生じさせる原因になってきたと思います。学校だけでできることはやるが、できないことは家庭や地域といっしょにやる。そこを明確にすることが大事だと思うのです。

## 子どものために何ができるか

**中間** なるほど、学校教育に子どもたちの学びや育ちのすべてを任せてしまう社会の無責任さが、学校教育をつぶしていったということですね。そこで京都市では、再び家庭や地域を呼び戻そうとされている。かなり、ご苦労も多いのではないのでしょうか。

**門川** 京都市が現在行っているのは、学校を核にした地域の活性化です。学校だけでできないことを、家庭や地域社会、さらには大学や経済界も含めた連携のネットワークをつくって対処していく。そのためには、まずは教師や学校の自己変革・行動改革が必要です。また、学校が説

明責任を果たすと同時に、地域社会に「あなたは、子どものために何ができますか」と大胆に問いかけ、さまざまな善意を受け入れていくのです。

連携とは、まず自己変革からです。次につながるだけでなく、重なり合うことです。学校・家庭・地域といった狭い役割分担ではなく、良い部分を互いに重ね合わせて相互に引き上げるような仕組み、そのきっかけづくりをしていく。そうすれば、学校だけでなく地域社会全体が良くなります。

例えば養護学校。京都市では「総合支援学校」と位置づけ、呼称していますが、そのうちの2校の高等部に4年前、職業学科をつくりました。その職業学科に入学した子どもは100%就職できることを目指したのです。これがなかなか大変だったのです。発達障害の方々には、昔は箱を作るなどの仕事が授産施設にありましたが、今やそういう仕事のほとんどは機械化されています。

そこで、志の高い京都の企業に、「デュアルシステム研究会」というものを立ち上げてもらい、高等部1年で職場見学を、2年



と3年でそれぞれ2カ月間の職場実習をお願いし、学校や家庭では学べないことを学べる仕組みをつくりました。

学校の中にも喫茶店やクリーニング店などを模した実習所があり、企業から人を派遣してもらい、ベッドメイキングや掃除などを教えてもらっています。しかし、「校内の実習では、子どもたちはどうしても働くことや仕事を頭で理解しようとしていた。ところが2カ月間の職場実習で、子どもは働くことを体で感じるようになった」と、あるお母さんがおっしゃっていたのです。その言葉が職場実習の意義を実証しているように思います。去年卒業した1期生42人全員が就職できたのも、企業にご支援いただいたこうした取り組みがあったからです。

学校でできること、企業でできること、親ができること、それらが重なり合ったら、すごいことができます。学校だけではできないことができるようになる。親にとつては、子どもを授産施設に行かせた方が安心なんです。そこでは福祉の対象として温かく見守ってもらえる。けれど、その子の持っている能力を伸

ばし、社会参加していくには一歩踏み出す勇氣も必要です。そのためには親に意識変革をしてもらう。企業にも協力をお願いし、教育の一端を担ってもらわけてです。

学校は、子どもが社会に出て自立して生きていける力を培うところです。障害のある子どもへの教育に取り組んでいると、日本の教育のいろいろな面が見えてきます。互いに批判し合っている関係から、力を合わせて共に高めていけるような関係へ。それが今の社会に求められていると思うのです。

## 対立する力が融合する力に

**中間** 地域の子どもを地域で育てようという結束力。それが持てたのも、皆さんが互いに信頼し合った結果だと思うのですが、なぜ京都ではそうした取り組みがうまく回り始めたのでしょうか？

**門川** 日本の公教育の最大の不幸は、戦後のイデオロギー対立が教育現場に持ち込まれたことだと思っています。本来、政治の場や大人社会で解決すべき問題が、全部学校の中に持ち込ま



地域ぐるみで子どもの安全を守る「子ども見守り隊」には、1万9,000人を超すボランティアが参加している。

れてしまった。とくに京都はそれが激しい土地柄でした。

現在、京都市ではコミュニティスクールづくりに熱心に取り組んでいます。10〜20年前だったと考えられませんでした。当時なら、地域のさまざまな対立が学校の中に持ち込まれていたことでしょう。

しかし、あるときを境に、そうしたぶつかり合いで消耗していたエネルギーが、子どもたちのために行動するエネルギーに変わり始めたのです。イデオロギー対立が厳しかった時代に、それぞれが真剣に頑張ってきたからこそ、ぶつかるエネルギーが融合する力に変わり得たのだと思います。もつとも、現実にはまだまだ厳しい軋轢あつれきもあります。

また、われわれはよく先輩から「徹底して現場に足を運べ」と言われてきました。そうした現場主義を貫いてきたことも大きかったと思います。

**中間** なるほど、そういう中から地域の学校への信頼というものがどんどん大きくなっていったわけですね。しかし最近では、学校はサービス機関に徹するべきだという意見も幅を利かせつ

つあります。サービスを受け取る側が、良いサービスを提供する学校を選べばいいと。サービスが良くない学校は、労力を注ぐよりも、淘汰されて然るべし。そういう競争原理が働けば、自ずと良い状況が出来上がるというわけですが。

**門川** 教育もサービスの一つです。質が高く、満足度の高いサービスを提供することは非常に大事だと思います。

京都市では、全児童・生徒に、先生の授業を評価してもらっています。「先生の話はわかりやすいですか」「質問に答えてくれますか」などと聞きますが、同時に「わからないところは質問していますか」「ちゃんと予習・復習していますか」とも聞く。親にも「学校便りをきちんと読んでいますか」「子どもに早寝・早起きをさせ、朝ご飯を食べさせていますか」などを尋ねます。学校に対する満足度を聞くと同時に、子どもや親にも自分自身を振り返ってもらうわけです。教育で大切なのは相互関係です。評価というものは、共に高め合うために行うべきです。一方的であつてはならない。そして、もし足りない部分があれば、み



んなで足し合っていく。そうすれば70点の学校が120点にもなります。そういう評価でなかったら、意味がないと思っています。

学校をラーメン屋さんに例えるのはどうかと思いますが、おいしくて行列のできるラーメン屋さんと、お客の来ないラーメン屋さんがあるとしたら、公立学校は通学区制度があるから、おいしくないラーメン屋さんもいやおうなしに存立します。だからダメだという意見がある。では、おいしいラーメン屋さんは支店をいっぱいつくり、まずいラーメン屋さんはつぶれていつてもいいのか。親が子どもの手を引いて、おいしいラーメン屋さんを探すように学校選択に奔走するのがいいのか。もともと、絶対にやっつてはならないのが、まずいラーメンを子どもに強制的に食べさせることです。

では、どうしたらいいのでしょうか。もしおいしくないラーメン屋さんがあったら、麺が悪いのか、ダシが悪いのか、あるいはお客さんの味覚が悪いのか、親も地域もラーメン屋さんもいっしょになって徹底的に分析するのです。そして、おいしいラーメン屋さんからいろいろ教えてもらう。そうすれば、まずいラーメン屋さんもおいしいラーメン屋さんに変わります。みんなで汗をかけば、必ず成果は出てきます。そうしなければ、地域社会がダメになり、ひいては日本全体がダメになってしまいます。全国チェーンの店だけが繁盛し、地域に根ざした店がつぶれていくことは、日本の未来にとって大変なことです。

### 学校を核に地域全体を元気に

**中間** 地域の力は、地域で向上させていこうということですね。

しかし、サービスの質や効率性などの面で、どうしても限られた地域の中では解決しきれないことなども出てきませんか。

**門川** 京都市では、全小中学校の図書館をコンピューター化することになりました。その分野では、ある大手出版取次会社が、全国の公立図書館などへの豊富なシステム納入実績を持っていたのです。ところが、それを導入したら、出版取次会社から学校に直接本が届くことになり、町の本屋さんがつぶれるのでは、という危惧がありました。

そこで、6年前に町の本屋さ



堀川高校で行われている「探究基礎」の授業。論文作成や研究発表などを通じ、主体的に学ぶ力を育成する。

んも含めて「子ども読書活動振興市民会議」というものを立ち上げ、その際に実績のあった書店組合もかわって「こども図書館ナビ」というシステムを開発してもらったのです。古い本にバーコードを貼る作業なども、町の本屋さんがPTAといっしょに行い、5年計画を2年前倒しして、今年度中にすべての学校にそのシステムが導入されます。そうすることで町の本屋さんも元気になるし、学校図書館も活性化します。

さらに、延べ1200人のボランティアを養成し、学校や地域の図書館に入ってもらう仕組みをつくりました。また、図書館だけでなく、養護学校でもボランティアを養成し、発達障害の子どもなどをサポートする取り組みをスタートさせました。

**中間** 突出した一つの企業の技術力がなくても、市民の知恵と汗の結集により、それ以上の効果も不可能ではなくなるわけですね。ところで、そういう、学校が核となって地域が元気になつていくような取り組みは、誰が提案し、音頭を取って実行しているのですか。

**門川** それは、やはり現場の知

恵です。親や地域の代表が参画する学校運営協議会、つまりコミュニティスクールを立ち上げ、知恵を出し合いながら、教職員といっしょに学校運営にかかわってもらいます。

私たちが目指しているのは、地域に開かれた学校です。そのためには学校も説明責任を果たさなくてはなりません。そこでまず、すべての学校でホームページを立ち上げ、学校便りを閲覧板で回すなどして、地域の人に学校をよく知ってもらいます。そして、どんな学校に足を運んでもらう。

学校参観というと、これまで日時が決まっていたましたが、それを月曜日から金曜日までいつでも来てくださいというように変えました。また、空き教室などを利用して、各学校に「ふれあいサロン」をつくり、お年寄りに給食をふるまったり、地域の人に来ていただけるようにしました。同時に、外部評価を含めた学校評価システムを全校で実施し、その結果をホームページで公開しています。学校運営協議会は、こうした取り組みを組織的かつ継続的に進めていくためのものです。

学校運営協議会を立ち上げる際は慎重論もありました。一つは、親の顔色を伺いながら子どもの教育や学校運営をしなければならぬのではないかと。今の公教育をより厳しくするのではないかと。という意見です。また、地域のさまざまな軋轢が学校の中に持ち込まれるのでは、という心配もありました。しかし、思い切って先陣を切って始めてくれた学校があつた。今年度中には、学校運営協議会の設置校が京都市内で110校を超える見込みです。これは全国の3割にあたるんですね。

このときの教訓として、議論も大事だけど、実際に行動に移すことが何よりも大切だということ学びました。学校運営協議会では、先生と親、地域の人がいっしょになって、子どものために何ができるかを考え、行動します。そうになると、地域で共に汗する（共汗）の輪が広がり、必ず良い方向に向かいます。

## 子どもは地域のかすがい

**中間** 学校を地域に開くと、地域の力で学校に活力がもたらされるということとはわかりまし

た。一方で、地域の活力が増すということもありますか。

**門川** 登下校時などに子どもの安全を見守る「子ども見守り隊」のボランティアは、1万9000人を超えました。図書館の仕事や発達障害の子どものサポートしてくれる「学校支援ボランティア」も1万5000人です。子どものためという共通の目的があるからこそ、そこまで人が集まる。子どもは地域のかすがいだとつくづく思います。

こうした活動の延長線上に、「独居老人の見守り隊」ができた学校もあります。子どもたちが自分たちで作った花と作文を持って、ボランティアの人といっしょに独居老人を訪問するんです。そうすると、お年寄りはそのすごく喜びます。ほとんど寝たきりだった人も「子どもが行く」と伝えておくと、起き上がってきちんと服を着て待っている。それが子どもの力なのです。

今、日本全国に小中学校が3万校以上ありますが、それらが開かれていったら、地域のコミュニティを再生していく大きな力になります。学校と家庭や地域、さらには大学や経済界などが連携し合うことで地域社会が



平成16年には大都市圏で日本初の公立併設型中高一貫校として、西京高校附属中学校が開校。志願倍率が11.8倍となり、話題を集めた。

活性化するし、大人たちも豊かな人生を送ることにつながると思っています。

京都市では、これまで大学レベルにとどまっていた産学公の連携が、初等教育の分野でも進みつつあります。企業や経済界も、自分たちが果たせる役割を考えていこうということで、「OK企業認証制度」というものを立ち上げました。父親の子育てを積極的に支援する企業をO（おやじ）K（子育て参加に理解のある）企業と呼び、仕事と家庭生活が両立・調和するワーク・ライフ・バランスの社会構築に向けた取り組みを進めていこうと計画しています。

**中間** 子どもを育てる場が地域を育てる場にもなるということですね。学校がそうした活動の中心になるには、やはり先生の力量も必要でしょう。

**門川** 京都市で教育改革に取り組んで感じたのは、教師にはものすごい潜在能力があるということです。例えば、1年で国立大学への現役合格者を1000人増やし、「堀川の奇跡」といわれた市立堀川高校。あれは教師を替えずにできたんです。

京都市では、かつて周辺部の

人口急増期に小中学校約80校を新設してきました。そういう意味では、義務教育優先で、高校の施設整備は二の次でした。築70年の堀川高校の校舎は、雨漏りをしていたので、その建て替えをしようというのが改革の発端でした。また、公教育に対する不信の要因として、都市部での公立高校の長期低落傾向がありました。そこで、進学面でも先頭を走る学校をつくろうとしたのです。

堀川高校には、新しい学科を設けて校舎も建て替えましたが、市内の優秀な教師を集中させることは一切しませんでした。堀川高校の改革をリードしたのは、堀川高校で何年間も教鞭を執ってきた先生たちでした。

京都市には、銅駝美術工芸高校というのがあります。明治13年に京都画学校として発足し、京都画壇の堂本印象さんや上村松篁さんら、人間国宝と文化勲章の受章者を7人輩出してきた学校です。10年前には国立大学の現役合格者がいなかったのですが、昨春は約90人卒業して30人が国公立合格し入学しました。全国で唯一の公立美術工芸学校ですから、美術の先



生は替えようがないのです。しかし、堀川高校の取り組みの中で学んだ先生が、校長、教頭として赴任し、改革を成し遂げました。

現在も堀川高校で頑張った先生たちが、西京高校という元商業高校の抜本改革に取り組んでいます。去年は206人の卒業生のうち113人が国公立大学に現役で合格しました。これも先生をほとんど替えずにできたことです。

京都の市立高校は9校しかありません。4校は美術や音楽、工業といった個性的な学校で、いずれも伝統校です。先生も全部で700人ほどしかないないので、替えたくても替えようがない事情もあるのは確かです。こうした一見、マイナスの要因が教師の意識・行動改革につながり、結果として、プラスに働きました。

そして、こうした潜在能力は、教師だけでなく、親や地域にもあります。荒れていた中学校が親の力を結集させて立ち直ったという例もあります。どんな親でも我が子を立派に育てたいと願っています。願っていたら、それは立派な潜在能力です。それを専門職である教師が

具体的にどう引き出すか。潜在能力があると信じ、芽生えた芽を伸ばす仕組みやきっかけをつくれば、ものすごく大きな力を発揮します。

### 未来の教師を育てる取り組み

**中間** そしてさらに、京都教師塾や塔南高校の教育みらい科のように、次の世代の教師まで育てていこうと取り組まれていますね。

**門川** 未来をより良いものにするには、現役の教師の力を最大限に引き出すと同時に、次世代の教師を育てていく必要があります。しかし、教師の志望者が減ってきたことから、教師塾をつくり、昨年は約600人が卒業しました。

教師養成に関しても、大学での学問と学校現場での実践が乖離し、互いに批判し合っているという状況があります。それを批判ではなく、互いに足し合うことで、優秀な教師を育成していくというのが教師塾の目的です。具体的には、大学でしっかりと勉強するだけでなく、現場にもどんどん入ってもらい、優れた教師やPTAの話を聞いたり、ボ



京都市では大学と連携した教員養成システムを推進。学生たちがボランティアとして教育現場で積極的に実践を積んでいる。

ランティアとして子どもに接し、実践を積んでもらいます。

また、教育委員会もかわって、京都教育大学や同志社大学、立命館大学などにより、日本で初めて連合教職大学院が創設されます。大学のまちという特色を活かし、京都を教員養成のメッカにしたいと考えています。

もう一つの取り組みが、市立塔南高校に教育みらい科をつくったことです。小・中学校のときに素晴らしい教師に出会って学校の先生になりたいと思って、大学に入学するころには教師になりたいというモチベーションが低下してくる生徒も多い。そこで、そうしたモチベーションを維持しながら、大学での教員養成につなげていきたいと思ったことが、高校に教育みらい科をつくった理由です。

15歳は、かつての師範学校に入学する年齢ですね。もともと、入学した生徒みんなが教師にならなくてもいい。高校時代に素晴らしい教師から学ぶことで、子どもを大切にするという原点を大事にしてもらいたいと考えています。

**中間** 先ほどから門川さんの

お話を伺っていると、あふれるほどの優しさを感じられます。ところで、門川さんご自身はどんな子ども時代を過ごされてきたのでしょうか。

**門川** 机の前に座って勉強するのが大嫌いな子どもでした。6人兄弟の真ん中で育ったのですが、教科書を読んで勉強するのは好きではなく、興味のあること、関心のあることばかりしていました。父が宗教家でしたので、多くの信者さんたちが出入りする家で育ちました。

高校時代には、ベトナム戦争の北爆が始まり、「ベ平連」の活動が盛んになっていました。私も参加していましたが、当時の京都は、高校にもいろんな大学のセクトが入ってくるほど、学生運動が激しかった地域です。

**中間** 母校の堀川高校も、学生運動が激しかった高校の一つでしたね。

**門川** ええ、そんな中で受験勉強もせず、結局、大学進学は断念し、家から近いということもあって市役所に入りました。どういうわけか、そこで教育委員会に配属になったのです。そして、教員組合などとの交渉窓口担当となったら、小・中学校で

習った先生たちと団体交渉の席で向かい合うことに……。そういう時代でした。

仕事に打ち込む中で、勉強もしようと思い、立命館大学の夜間で学びました。教育実習で堀川高校の定時制に行き、「お前は組合に対して厳しいやないか」と、指導の先生からつるし上げもくりましたよ(笑)。

## 行動すれば「共汗」が広がる

**中間** 激動の時代を、まっすぐに生き抜いてきたからこそ今のこの感じがしますね。ところで、門川さんは「便きよう会」というトイレ掃除をする会の会長もされていますが。

**門川** トイレ掃除を通じて心を磨くという活動で、鍵山秀三郎さんというイエローハットの創業者が始められたものです。12年前にその掃除哲学に学ぼうと、「京都掃除に学ぶ会」が立ち上がったとき、知人に誘われて参加したのがきっかけでした。父が昔、「人間の値打ちや尊さは、掃除をしている姿を見ればよくわかる」と言っていたことがありました。その言葉がストーンと胸に落ち、それから学校や寺

社などを回ってトイレ掃除をするようになりました。

そのころから「これ子どもがしてくれたら」とか「先生とPTAの人がいっしょにできたら」ということを仲間内で話していましたが、O157の食中毒騒動などもあつて、当時は子どもに汚いことをさせてはいかんといい風潮が強く、実現には至りませんでした。ところがありがたいことに、3年前に教職員などで勉強会をつくろうということになり、約40人が集まりました。それが「便きよう会」です。現在では会員が約200人になっています。

平成17年には「掃除に学ぶ会」の第1回世界大会がブラジルで開かれ、昨年は台湾で第2回大会が行われました。台湾では総勢約1万3500人が集まり、学校などでトイレ掃除をし、私も基調講演をさせてもらいました。日本からは約500人が自費で参加したのですが、ほかにも中国、フィリピン、カナダなどたくさんの方々が参加者が来ていました。「ニューヨーク掃除に学ぶ会」など、この運動は全世界に広がっています。

**中間** ありがとうございます



教育委員会が実施する各種研修のほか、自主的な研究会活動も盛んだ。写真は研究会活動の成果を活かした「授業実践力向上講座」

た。門川さんのリーダーシップのもとに、京都の教育が地域とともに改善されていく様子を知ることができました。最後の質問です。日本の公教育に希望は持てるのでしょうか。

**門川** まさに希望のかたまりだと確信しています。みんなが子どものために共に汗をかく「共汗」で学校は変わるし、すでに変わり始めています。

学校を核に地域社会や経済界などがネットワークをつくり、学校が地域と深くかわつていく。そのため、まずは教職員の意識改革と学校の構造改革が不可欠です。そして、地域の人々に連携を呼びかけ、いっしょに行動していく。そうすれば、必ず「共汗」が広がります。

京都にもいろいろと課題はあります。去年の8月、弁護士や精神科医、臨床心理士、警察官OB、地域やPTAの代表にも入ってもらって、「学校問題解決支援チーム」を立ち上げました。道理に基づかない要求をする問題のある親が増え、先生が精神的にまいっています。子どもの教育権も保障されない。そうした事態を的確に把握し、処方箋をつくって手だてを講じてい

く。学校が全部を抱え込まないようにするためです。

同時に、「自律促進教育チーム」というものも立ち上げました。問題行動や暴力などを繰り返す子どもが増えています。熱心な学校ほどそれを抱え込みます。社会で許されないことは学校でも許してはいけません。その子ども自身も立ち直らせていく。そのため、弁護士や現職・OBの警察官も入ったチームを組んで、学校がきちんと対応していくことが肝心です。

そういう善意を結集し、みんなで学校を良くしていく。善意だけで通用しないことは、外部の専門家も入れている確な対応をする。そうすれば、学校も変わるし、地域社会も変わっていきます。社会全体がより豊かで生きがいのある国へと変わっていくことは、十分可能だと確信しています。

## かどかわ だいさく

1950年、京都市生まれ。1969年、京都市教育委員会事務局に採用。1999年、同教育次長。2001年、同教育長・教育委員。2008年2月、京都市長に就任。1974年、立命館大学二部法学部卒業。2006年、教育再生会議委員。現在、中央教育審議会初等中等教育分科会・同教員養成部会・同教育振興基本計画特別部会委員。衆議院教育基本法特別委員会(2006年)・衆議院教育再生特別委員会(2007年)で参考人として意見陳述質疑に出席。



# 育んで、育つ

生きる力を大地から学ぶ

鷺尾 梓 HRI 研究員



畑を耕し、種を蒔き、雑草を抜き、水や肥料をやり…。  
収穫までの道のりは長く、だからこそ、得るものも大きい。  
農作物と向き合い、仲間と向き合う9か月間を通して、  
生きることの根っこを学ぶ「塾」がある。



「ゴボウをまっすぐに育てるのが、こんなに大変なことだったんだ」  
「農家の人ってすごいなあ」——店頭に並んでいる状態でしか見たこと  
のなかった野菜を自らの手で育てる経験は、驚きと発見に満ちている。

## 生きる力を学ぶ「塾」



都心部より一足早く色づいた木々や、  
茶畑の広がるのどかな風景が、実際の距離  
よりずいぶん遠くに来たように感じさ  
せる。新宿から電車で約1時間、新松田  
駅からバスで20分ほど、西丹沢の山々や  
水源林に囲まれた寄というところに、市  
村自然塾はある。

塾の基本理念は、「生きる力を大地か  
ら学ぶ」。小学4年生から中学2年生まで  
の男女各28名の塾生が、3月下旬から11  
月下旬の隔週末2泊3日を塾で過ごし、  
農作業や共同生活を通じて学んでいる。  
運営にあたるNPO法人市村自然塾  
関東は、「地球環境保全」と「青少年健全  
育成」を社会貢献活動の柱に掲げる株式  
会社リコーによって支えられている。「市  
村」という塾名は、リコーの創業者・市村

清氏の名前からとられたものだ。「会社・  
社員・株主が三位一体となつて行う社会  
貢献」をモットーに、当期利益から配当金  
を差し引いた額の1%を積み立てる「社会  
貢献積立金制度」が活用されている。20  
02年の開塾から6年、卒業生は290  
名を超えた。株式会社リコーを定年退職  
後、嘱託職員として塾生を見守ってきた  
現塾頭の本全政義さんにお話を伺った。

## 自然がもたらす恵みと試練

塾での活動の軸は、農作業。1200坪  
ある農園には、全員で力を合わせて栽培  
する「共同農園」と、7人1組がチームと  
なり、自分たちで何を栽培するかを決め  
るところから取り組む「チーム農園」があ  
る。2007年度の塾生（女子）の最終ス  
テージにあたる取材当日は、チーム農園  
の収穫を終え、畑の土を耕して塾に返還  
する作業が行われていた。首の隠れる農  
作業用の帽子を被り、慣れた手付きで鍬  
を使う姿は堂に入っている。最後は、「あ  
りがとうございました」と畑に礼をして  
作業を終えた。

畑を耕し、種を蒔き、雑草を抜き、水  
や肥料をやり…、農作物の収穫までの道  
のりは長い。だからこそ、収穫の喜びは大  
きい。「我々は『足音便り』と言うのだけ  
で、野菜は、畑に足を運んで世話をし、  
足音を聴かせてやるほどよく育つ。やれ  
ばやつただけ、報われる。ゲームをするよ



畑で何を作るか、どんな作業が必要か、役割をどう分担するか。チームや全体でさまざまなことを話し合う。住む地域も、年齢も異なる子どもたちが出会い、ぶつかり合い、協力し合いながら共に過ごす経験も、塾での大切な学びの機会だ。

うな楽しさとは違う、汗を流して初めて味わうことのできる楽しさや喜びを教えてくれる」と、塾頭の木全さんは言う。

一方、思う通りの収穫が得られないこともある。台風の被害を受けたり、病気になったり、シカやイノシシに食べられてしまったり。畑を食い荒らす動物たちと格闘しながら、子どもたちは自然に、知恵を出し、工夫し、協力し合うことを学ぶ。そして、それでもどうにもならない結果を受け入れること、収穫の恵みに感謝することも学んでいく。

## 「当たり前」の意味を知る

塾生は、塾での共同生活からも多くを学んでいる。あいさつをすること、時間を守ること、身の回りの整理整頓をすること、好き嫌いなく何でも食べること、自分より小さい子の面倒を見ること。

「当たり前前」のことが当たり前になるように、塾生は、塾での共同生活からも多くを学んでいる。あいさつをすること、時間を守ること、身の回りの整理整頓をすること、好き嫌いなく何でも食べること、自分より小さい子の面倒を見ること。『給食費を払っているのだからいただきます』と話す親がいると聞く。なぜ、いただきますというのか、なぜ食べ物を粗末にしてはいけないのか。ここではそれをわかるようになってほしい。塾での食事には共同農園で取れた野菜が使われ、塾生も食事の準備を手伝う。そこには、誰に言われなくても姿勢

を正して「いただきます」と言う塾生たちの姿があった。9カ月間という時間は、自然と向き合うために必要な時間でもあり、「当たり前前」の意味を理解し、身につけるために必要な時間でもあるのだ。

約3分の1が一人っ子という塾生たちにとつて、共同生活は、仲間との協力の仕方や、時にはけんかの仕方を学ぶ場でもある。けんかをしても、3日間は一つ屋根の下で過ごし、農作業のためには協力しなければならぬ。始めはけんかばかりだった塾生同士がだんだんとチームらしくなっていくさまを、木全さんは見守ってきた。

## 不親切な親切

塾での活動には、「お父さん」のような存在である塾頭の木全さんのほか、「お兄さん」「お姉さん」のような世話人、事務スタッフ、看護師、栄養士、農業指導のボランティアなど、専門もバックグラウンドも異なるさまざまな大人がかかわっている。

塾生とかかわる上で、スタッフの間で共有されているのは、「4無」――「指示しすぎない」「命令しすぎない」「教えすぎない」「世話を焼きすぎない」の基本姿勢。安全面についての指導は徹底して行うが、塾生が自分で考え、気づくことが重視されている。最初は、活動の目標を伝えて、やり方や役割分担を自分たちで考えるところから。それができるようになって





最終ステージ、塾生たちは畑の土を耕し、道具をきれいに整えて9か月間の活動を終える。収穫した作物を持ち帰り、次の塾生たちにはコムギの苗やタネイモを贈る。「いつも思いやりと感謝の気持ちを忘れないでほしい」と、塾頭の木全さん。

9か月間の通塾を経て、塾生にはどのような変化があるのだろうか。

「食べ物の好き嫌いがなくなった、礼儀正しくなった、我慢強くなった、積極的になった…」など、接していて感じることや、卒業生の親から伝えられる変化はいろいろある。ただ、「と、木全さんは続けた。「もっと大切な、深いところでの変化は目に見えない。10年後、20年後になってみなければわからない」

塾生がここを離れた後のことも気がかりだ。毎年、入塾希望者数が募集を上回るため、一人でも多く体験の機会をと、

## ここは「別世界」？

くると、目標からすべてを自分たちで考える。「ああしなさい、こうしたらいいよ、と言ってしまった方が早いけれど、そうしてしまつたら、自分で考える機会を奪うことになる。一見親切でも、それは子どものためにはならない」

道具を大切にしなかったり、他の塾生に暴言を吐いたりする塾生を叱ることもある。家庭でも学校でも、だめなことはだめと、きちんと叱れる大人が少なくなっている。でも、何をして怒らないことが優しさではないのだと、木全さんは言う。「不親切な親切というのかな、その場では嫌だ、怖いと思われてもね」。「長い目で見てその子のためになるかどうか」が、塾生と向き合う軸になっている。

## 種を蒔き続ける

株式会社リコーが社会貢献事業として市村自然塾の活動を始めた翌年、リコーの主要関連会社であるコカ・コーラウエストホールディングス株式会社も加わって、佐賀県にも「市村自然塾 九州」が誕生した。総合塾長の浜田広さんは、活動のさるなる広がりを感じている。「リコーはパイオニアとしてここをつくった。農作業や共同作業には、子どもの学びにとって大切な要素が詰まっていると思う。日本各地でさまざまな企業や組織が知恵と力を出し合つて、このような場が少しでも増えなければいい」

種を蒔き、育むという行為には忍耐が必要だが、その努力は必ず報われる。こつこつと種を蒔き続ける市村自然塾の活動に力をもたらした。

株式会社リコーが社会貢献事業として市村自然塾の活動を始めた翌年、リコーの主要関連会社であるコカ・コーラウエストホールディングス株式会社も加わって、佐賀県にも「市村自然塾 九州」が誕生した。総合塾長の浜田広さんは、活動のさるなる広がりを感じている。「リコーはパイオニアとしてここをつくった。農作業や共同作業には、子どもの学びにとって大切な要素が詰まっていると思う。日本各地でさまざまな企業や組織が知恵と力を出し合つて、このような場が少しでも増えなければいい」

種を蒔き、育むという行為には忍耐が必要だが、その努力は必ず報われる。こつこつと種を蒔き続ける市村自然塾の活動に力をもたらした。

# 「科学知らず」の君たちへ

## サイエンスの最先端とリアルを伝える若手研究者たち

澤田美奈子 HRI研究員



科学は難しい？ わからない？ 嫌われている？ いいえ、そんなことはない。  
科学の「わくわく」をうまく伝えることができれば、「科学は面白い」。  
そう思える子どもたちがきっと増えていくことを  
リバネスの若手研究者たちの取り組みは証明してくれる。



よく「見る」ことはサイエンスの基本。目の前の出来事や生き物をじっくりと見て、それを描いたり、記したりする。面白いのは、子どもたち一人一人が異なる着眼点を持っていて、それぞれが新しい発見をすること。子どもたちは、自分で発見することによってさらに夢中になっていく。

### 若手研究者が伝える科学

「科学嫌い」の子どもが増えているらしい。去年のPISA調査でも、日本の高校生の理科への関心が極めて低いことが示された。また社会に目を向ければ、遺伝子組み換え食品、遺伝子診断、クロロリン、環境ホルモンなどの（よくわからないサイエンス）の情報が氾濫し、不安をおおる。だけど私たちの感じる「ふしぎ」に答える科学が面白くないわけがない。大人も学校も社会も、そんな科学の本当の「わくわく」を子どもたちに伝え損なっているのではないか。

そんな問題意識のもと、最先端科学の若手現役研究者たちが立ち上がり、2002年6月、有限会社リバネスを設立（2004年7月、株式会社へ組織変更）。2003年に経済産業省「バイオ人材育成システム開発事業」に採択され、科学と社会との架け橋となる若手研究人材の育成に力を注いできた。その後、「身近なふしぎを興味に変える」をキャッチフレーズに、小中高生を対象とした理科教育支



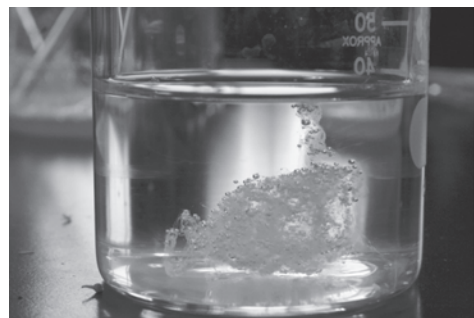
援、研究者のためのキャリア支援、ウェブサービスやコンサルティング事業にまで活動の幅を広げている。

今回は、幅広い活動の中でも看板事業の一つ、子どもを対象とした理科の実験教室の取り組みを紹介しよう。実験教室は、若手研究者たちが学校の教室に向き、DNA解析などの実験と講演とを通じて、バイオテクノロジーの基礎知識から研究の最先端までを伝える一連のプログラムだ。ご自身も研究者として日ごろから大学でバイオ研究にいらしめながら、実験教室スタッフとして活躍されている磯貝里子さんと奥田郁美さんにお話を伺った。

### 最先端に触れる意味

学校の理科の授業との大きな違いは、リバネスの実験教室では教科書の範囲を超えた、最先端科学を伝えていること。例えば、研究者たちのアドバイスのもと、子どもたちはDNAの抽出から解読までを体験する。磯貝さんは「小中学校ではもちろん、高校でさえ遺伝子やDNAについて学校の教科書では詳しい内容は触れられていません。高校の教科書に『DNAはATGCでできている』という知識は載っていても、ではAがいったい何なのか、子どもたちは知らない。実験や体験することも含めて、そういった知識を身につける機会にしたいという先生からのご要望が強くあります」と話す。





“生き物の設計図「DNA」”。子どもたちは、その言葉だけ聞いてもよくわからない。けれど、自分でDNAを野菜などから抽出してみることで、生き物がDNAを持っていることを実感できる。さらに、A・T・G・Cの塩基を一つずつつなげた超大作のDNA模型を作成し、その構造を理解。自分で作るからこそ、心に残る。

日々高度化・専門化する現在の暮らしの中のサイエンスのすべてを、学校の先生一人で伝えるのは難しいが、リバネススタッフの協力を得ることで、最先端のサイエンスが、楽しく身近に深く感じられるものになっていく。実験教室のプログラムはどれもがオーダーメイドで、学校の先生とリバネススタッフとが互いに協力しながら作っていくそう。そんな柔軟な姿勢も、立場や年齢が先生と子どもたちとの間に位置し、両者の抱える問題意識を共有し理解できるリバネススタッフならではのものだろう。

## 丁寧に、リアルに伝える

リバネスの実験教室は、伝える中身だけでなく、伝えるスタイルにも定評がある。「実験のときには4〜5人の小グループごとに1人の研究者が担当するという進め方も、多くの先生から評価をいただいています」と磯貝さんは話す。普段の一斉型授業ではかなえにくい、子どもたち一人ひとりの作業を見守り、アドバイスをを行うという細やかなサポートが、納得感ある着実な学びへとつながっているようだ。

また、現役研究者だからこそ膨らませられるネタもお楽しみの一つ。「実験器具は、普段から自分の研究で実際に使っているもので、使い方のコツやヒントなどの（小ネタ）を挟みながら説明します。また、デジタル式目盛りのマイクロピペットなど、

学校では目にするものがない装置に興味を持つ子どもも多いですね」と磯貝さん。奥田さんは「今自分がやっている、まさにその操作が、実際の研究の現場ですごく大きな意味があるんだという迫力、リアル感が味わえるのもリバネスの実験教室ならではの」と説明する。こういった「リアル」が、学校の通常の実験にはない臨場感・緊張感を生み、子どもたちの「わくわく」を引き出すトリガーとなっているに違いない。

ただし、奥田さんも磯貝さんも、本当はDNA解析の専門家ではなく、普段はまったく別の研究を行っている。「知識は自分で勉強しますが、実際の伝え方や進め方は経験のある先輩スタッフから盗みながら経験を積んでいくしありません」と奥田さんは打ち明けてくれた。実験教室の大きな魅力である「リアル」は、そんなスタッフの影の努力に支えられている。

## 互いに学び合う

「週1回の授業を3カ月間」のような長期連続型プログラムも作れるのがリバネスの実験教室の特徴。もちろん単発企画も多数行っているが、じっくり時間をかけるからこそ感じる子どもたちの変化がある。「最初は『何やってるのかわからない』という顔をした子が多いんですが、回を重ねていく中で、だんだん変わってき



実験教室は、一人で机に向かうだけでは終わらない。例えば、DNAの転写翻訳をゲームで学ぶときも、実験をするときも、考察をするときも。若手研究者や友だちといっしょに観察し、体験することで、一人では気づけないものに気づくことができる。



お話を伺った奥田郁美さん(左)と磯貝里子さん(右)。二人ともリバネススタッフとして数多くの実験教室で活躍する傍ら、奥田さんは糖鎖生物学、磯貝さんは植物細胞工学を専門とする、現役のバイオテクノロジー研究者でもある(2007年12月現在)。

ます。『よく考えたんだ、実はDNAってこういうふうに読むんじゃない?』という新たな疑問や、『難しいけど面白いよね』という感想が聞けたときはやりがいを感じます」と奥田さんは話す。研究者が一方的に急き立てるようにして知識を流し込むのではなく、試行錯誤を許容し、想像力を働かせる十分なゆとりを持たせることで、子どもたちは自分なりの理解と新たな疑問を持てる。そんなゆとりの中で湧いた新たな疑問や興味が、より深く科学を知りたくなる気持ちを刺激するのだろう。

さらに、実験教室は子どもたちだけでなく、スタッフである研究者自身の学びの場にもなっている。「大学でのプレゼンテーションは、論理的な順序立てや形式を重視していましたが、人をいかに惹きつけるかや、自分の主張を明確に伝えることが大事だと知りました」と、奥田さん。

### より多くの「きっかけ」を

リバネスの活動には大きくわけて2種類ある。一つは、実験教室のように、学校など外部機関とコラボレーションしながら展開する活動。一方、リバネスの独自主催による活動も最近盛んだ。2007年の「Café de Leavenest(カフェ・ド・リバネス)」完成をきっかけに、一般の人々が研究者と交流する場「サイエンスカフェ」を定期的に実施、毎回満員御礼の状態だ。

また、中学校・高校に向けて科学雑誌『someone』を7万部発行するなど、科学を伝える媒体や方法、対象はさらに広がりを見せる。そうした中、「リバネスの『科学を伝える活動』としてどれが一番理想ですか?」と尋ねると、「両方です」と力強く返ってきたのが印象的だ。

「学校の先生の『子どもを見る力』『子どもの言葉を引き出す力』には私たちは及びません。保護者の方にとっても、学校でDNAのような最先端の科学を教えてくれる、という事実があるのとないのとは大きく変わるでしょう」と言う磯貝さん。その言葉からは、学校という場所の重要性への深い認識とそこにいる先生に対する強い信頼感が伝わってくる。

その横で「学校の指導要領などの制約に縛られず、私たち研究者の思いや普段見えない部分をふんだんに伝える場所として、リバネスオリジナルのイベントもどんどん開催していきたい」と話す奥田さんの言葉からは、研究者としての強い自負心と社会的責任感が垣間見える。

リバネス発の、新しいけれど身近、難しくそうだけどわくわくする科学との出会いをきっかけに、サイエンスに興味を持つ子どもたちが今後もどんどん増えていくに違いない。その光景を目にすれば、私たちは「科学嫌い」と思っていた子どもたちが、実は「科学知らず」に過ぎなかったということに気づかされるのではないだろうか。



# 新しい価値を生み出す力

子どもが「アート」と出会うとき

鷲尾 梓 HRI研究員



「影絵ミニシアター」「パイプの楽器で音楽をつくる」「五感でダンス～コンタクト・インプロビゼーション」「自分の街のツーリスト・インフォメーション・センターをつくる」——アーティストによるワークショップ型授業「ASIAS」では多様なプログラムが行われる。

教室にアーティストがやってくる。  
「ドレミ」と違う音階。方眼紙のような、見慣れない楽譜。  
いつもと違う経験、いつもと違う出会いは、  
子どもたちの心に何を残すのだろうか。



文化祭はカット、学芸会もカット。「学  
力向上」が重視される中、学びの場では、い  
わゆる「アート」にかかわる活動はそぎ落  
とされてきた。そうした中、あえて「今こ  
そ『アート』の視点が重要だ」と、NPO法  
人芸術家と子どもたち代表の堤康彦さん  
は言う。その思いから、企業所有のホール  
やギャラリーで舞台公演や美術展覧会を  
手がけてきた経験を活かし、1999年、  
学校を舞台にアーティストによるワー  
クショップ型授業を実施する「ASIAS（エ  
イジアス）」を立ち上げた。

その後、廃校となった中学校（東京都豊  
島区・にしがも創造舎）を拠点に、地域  
向けのプロジェクト「ACTION」（ア  
クション）を始動。「学校」と「地域」とい  
う二つのフィールドで、子どもとアーティ

## 「アート」というアプローチ



ストの出会いの場をつくる活動を展開し  
ている。

## 教室にアーティストがやってくる

「ASIAS」は「Artist's Studio In  
A School」の略。小中学校や保育園に  
アーティストがはかしていき、教師との協  
力のもとにワークショップ型の授業を実  
施する活動である。アーティストは、作曲  
家や振付家（コンテンポラリーダンス）、美  
術作家など多様で、授業枠も総合的な学  
習の時間、図工、音楽、体育、国語など、さ  
まざま。あらかじめ決まったパターンは  
なく、教師・アーティスト・コーディネー  
ターの3者で話し合いながら、オーダー  
メイドの授業をつくる。

たとえば、江東区の小学4年生を対象  
とした授業「パイプの楽器で音楽をつく  
る」は、音楽家であり、美術家でもある町  
田良夫さんと、音楽教師の協働で実施さ  
れた。紙筒を使って自分たちで楽器をつ  
くり、オリジナルの曲を演奏するという  
ものだ。「ドレミ」とは違う音階や、方眼  
紙のような見慣れない「楽譜」に戸惑いな  
がらも、子どもたちは「こういう『音楽』  
もあるんだ」と、いつの間にかその世界に  
入り込んでいく。

## 出会いがもたらすもの

授業は、ノコギリで紙筒を切り、楽器



「ACTION!」プログラムの一つ、「どこどこ!巨大紙相撲」では、ダンボールで等身大の力士を制作。完成した力士を担いで近くの商店街に出かけて行き、地域の人から「しこ名」をもらう。「千秋楽」は300人以上の人でにぎわった。



をつくるところから始まる。「音楽の授業でノコギリを使うの!」——子どもたちは驚くが、それもこのワークショップのねらいの一つだ。「子どもは本来、柔軟に発想する力を持っているが、周囲から影響を受けやすい分、知らず知らずのうちに固定的な考え方をしてしまっていることも少なくない。」これは音楽、これは図工」というように、学ぼうとしていることをまず『教科』の枠組みに当てはめてしまおう」と、堤さん。ワークショップでは、いつもと違うものの見方に触れ、自由に発想する面白さを体験することが重視されている。

カギとなるのはアーティストの存在だ。堤さんは、アーティストを「社会の問題や現象を常識とは少し違う角度から見ることで、新しい価値や表現を生み出そうとしている存在」と説明する。そのアーティストとの出会いが、自分が感じたことを素直に表現したり、自分とは異なる考え方を受け入れることにつながり、多様な他者とコミュニケーションを取っていくための土台になる。堤さんが「今こそ『アート』の視点が重要だ」と考える理由の一つが、ここにある。

## 大胆に、そして繊細に

しかし、学校に、アーティストというわが「異質」な存在が入り、既存の枠組みを「壊す」というやり方は、乱暴にした

り、強引にしたりしたので、うまくいかない。子どもたちのことをよく理解し、ワークショップ当日と前後の学びとをつないでくれる教師との協働は欠かすことができない。

また、ASIASの授業を実施するのが初めての教師にはワークショップ経験が豊富なアーティストを、過去に何度も実施している教師には新しいアーティストを：というように、教師とアーティストのマッチングにも、コーディネーターとして細心の注意を払う。大胆な取り組みは、子どもを取り巻く大人たちの細やかなまなざしによって支えられているのだった。

## 子どもと地域をつなぐ「しかけ」

芸術家と子どもたちのもう一つの活動「ACTION!」では、地域をフィールドに、子どもだけでなく、家族や地域住民など、普段出会う機会の少ない人同士が出会い、交流する場をつくり出す取り組みを行っている。

活動の拠点に「すがも創造舎」の入口には、地域の人といっしょに花や野菜などを栽培する「Greeting Greensグリグリ・プロジェクト」の畑が設けられ、かつての中学校の教室では、親子を対象としたワークショップが開かれている。このほか、企業と共同で、子どもたちとアーティストがパフォーマンス作品を創作・公演するプロジェクト「NEC×ACTION!子





活動の拠点となる「にしすがも創造舎」には、地域の人といっしょに花や野菜を栽培する畑や、絵本の読み聞かせなどが行われるスペースもある。「参加者の発案で、我々が思ってもみないような出来事が起きてくるとうれしい」と、代表の堤さん。



どもとつくる舞台」や、地域資源を活用しながらコミュニティの再生を図るプロジェクト「アサヒ+ACTION! 子どものいるまちかど」など、さまざまな活動がある。題材こそ多様だが、これらに共通するのは、さまざまな立場の人が出会い、自然に活動にかかわっていく、かわりなくなる「しかけ」があるということだ。

## 頭ではなく、心を動かす

「子どものいるまちかど」シリーズの一つ、「どんどこー! 巨大紙相撲」では、「出稽古が「しかけ」の一つだった。「どんどこー! 巨大紙相撲」は、現代美術ユニット「KOSUGE 1-16」のもと、子どもたちがダンボールで等身大の力士を作って、対戦させるというもの。制作から「千秋楽」までの全5回の活動の中には、近くの商店街に出かけて行き、力士の「しこ名」のアイデアをもらったり、出来上がった力士を担いで、あいさつ回りをする「出稽古」があった。「出稽古」からは、魚屋さんが名付け親となった「銀鱈関」、老人ホームの名前から一字をもらった「きくの川関」など、地域にゆかりのある「しこ名」のついた力士が誕生した。「千秋楽」には小さな子どもからお年寄りまで300人近くが集まり、力士の名付け親が「助っ人」として紙相撲に参戦する場面もあった。

「ただ、人が集まっただけでは、そこに交流は生まれない。『イベントを開催しま

すから来てください』というよりも、『手伝ってもらえませんか』と働きかけることを意識している」と、堤さん。そして何よりも、子どもも大人もいっしょになって楽しんでる様子が印象的だ。

「子育てを地域で」との意識や理念の共有は進んでも、なかなか行動に結びつきにくい現状を打開していくのは、頭ではなく心を動かす、このような新しい発想かもしれない。

## 新しい価値を、出会いの場から

1999年の活動開始から7年、ASIASの参加者数は1万3000人を超えた。堤さんは「一人でも多くの子どもにアーティストとの出会いの場を、と考え」と、この数ではまだまだ足りないと言わうが、近年では、芸術家と子どもたちのように、「出会い」の場づくりに取り組む組織も増えてきている。2004年には、NPO法人芸術家と子どもたちがディレクションを行うトヨタ自動車株式会社の社会貢献プログラム「トヨタ・子どもとアーティストの出会い」が始動するなど、全国各地で「出会い」を生み出すしくみづくりも始まっている。

「学びの場」づくりは、魅力的な「出会いの場」づくりから――。多様な他者と豊かなかわりを持ちながら、次代に新しい価値を生み出していく人を育てる「場」づくりが今、広がりを見せている。

# 「せと者」たちの未来づくり

地域の子どもは地域が育てる

澤田美奈子 HRI 研究員



子どもが育つ場所は、学校の中だけでも、家庭の中だけでもない。  
地域社会の中にも子どもにとって豊かな学びの機会は溢れている。  
愛知県瀬戸市では、キャリア教育を通じて、学校と地元の企業と地域の  
大人たちとが一体になり、子どもの学びの場づくりが行われている。



1300年の歴史を誇る瀬戸市の産業「せともの」づくりを活かした  
プログラム。プロの職人から直接やきものづくりを学びながら、地  
域の伝統や文化についても理解を深める。また、自分たちの製作  
したやきものを販売する体験からは、ものを売ることの工夫や喜  
び・苦労、働く人たちの役割について学ぶことができる。

## まちぐるみのキャリア教育

名古屋から電車で揺られること40分。  
目的地の瀬戸市駅に降り立ち、改札を抜  
けようと切符を手渡した駅員が黒い詰  
襟姿だ。「まるで中学生みたいな制服を  
着た駅員だな」と思いよくよく見たら、  
駅員ではなく本当に中学生だった。中学  
生は緊張した面持ちでスタンプを握り  
しめ、初々しい手つきで行き交う客の切  
符の一枚一枚を確かめるように印を押  
す。客の流れが途切れると、自分たちの  
横で別の作業を行う（本物の駅員）の姿  
を注意深く観察している。

駅だけでなく、レストランや保育園、工  
場、そして今回の取材先の商工会議所：  
愛知県瀬戸市では至る場所で中学生が  
大人たちと共に働く光景に出会う。これ  
が、瀬戸商工会議所が中心となり、まち  
全体で取り組んでいる「瀬戸キャリア教  
育事業」の一環である。キャリア教育事業  
に携わる、瀬戸商工会議所・業務課の加  
藤滋樹さんにお話を伺った。

## 商工会議所が教育に携わる

「せともの」の産地として知られる瀬戸  
市が、キャリア教育事業に取り組むよう  
になった背景には、伝統的な「やきものづ  
くりを活かした教育」がある。「僕が小学

生だったときにも、地元の陶芸作家が学  
校に教えに来てくれた覚えがあります。  
地域の人が学校に入って、教育に参加し  
ていく土壌が古くからあるのでしょう」と  
加藤さん。

近年、安全対策のため、外部の人の出  
入りを禁じる措置を取る学校が多いの  
とは対照的に、瀬戸市の学校は囲われて  
いない。むしろ地元の人々の目が行き届  
き、自由に出入りできる雰囲気があるほ  
うが安全だとのこと。そんな開かれた学  
校のあり方も、地域全体に「瀬戸の子ど  
もは瀬戸が育てる」文化が広く根深く形  
成されていることを表している。

そうした中、2005年、経済産業省  
主導の地域自律・民間活用型「キャリア  
教育プロジェクト」が委託され、瀬戸商工  
会議所を中心とした「瀬戸キャリア教育  
事業」が動き始める。

だが、そもそも商工会議所は、中小企  
業の経営支援や地域産業の経済振興を  
サポートする組織だ。全国各地の500  
カ所以上の商工会議所の事業内容を眺  
めても、主な業務内容は、中小企業の経  
営相談、地域ブランドの構築、PRイベン  
トの開催、各種検定の実施など。子ども  
の教育に携わるケースはまれである。

瀬戸商工会議所内でも当初は、なぜ商  
工会議所がキャリア教育を？と困惑す  
る声もあったというが、所内には教育委  
員会に長年勤めていた経験を持つ所員が  
おり、子どもの教育問題への関心が高かつ





市内の保育園、タイルメーカー、せともの製品の検品所、スーパーマーケットで「職場体験」をする中学生。「職場体験」では、実際に現場の中に入り、働くことの楽しさ・大変さだけでなく、「あいさつをする」「決まりを守る」「物を大切にすること」といったことも身につける。当たり前のことを当たり前にできる人間になることは、将来のための大事な基礎となる。



たことから、このキャリア教育事業を引き受けることを決めた。さらに、「僕はもとも『事務所』については仕事は始まらん!』と思う性分。やはり自分の足で外に出ていろんな人と会って話をすることで、いい仕事はできると思うので」——そんな加藤さん自身のバワフルな性格も、商工会議所がキャリア事業へ踏み出すことを後押しした。

## 企業と学校の良き仲人として

キャリア教育プログラムの内容は、駅で見かけたような、地域社会のさまざまな現場での「職場体験」、地元で働く大人を市民講師として学校に招き、働きがいや生きがいについて話を聞く「職業講座」、陶器会社の設立から商品企画、製作、販売、損益計算までをすべて体験するワークショップなど。これらのプログラムを、キャリア教育の全国的先駆者「NPO法人アस्कネット」の協力のもとで展開している。

その中で商工会議所が果たしている役割は「コーディネーター」だ。「小中学校の要望を聞き、教育や行政機関、産業界と連携しながら、要望に応じた支援を行うのが僕たちの仕事です」と加藤さんは言いつつ、一例として、学校に配布している「職場体験受け入れ先リスト」を見せしてくれた。そこには市内の300以上もの企業がリストアップされ、仕事内容・か

かる日数・受け入れ人数など、具体的な情報を一覧できる。これが生徒たちの職場体験プログラムを考える学校の先生にとって大きな手助けになる。

リストに名を連ねるのは、商工会議所の会員企業や事業を通じて知り合った商工業者の人々。「まちを愛している人、子どもの教育のために何かしたいと考えている企業はどの地域にもいると思います。それを発掘できたのは商工会議所としての功績かもしれません」と加藤さんは分析する。こうした商工会議所の持つ人と人とのつながりという資源をフルに活かし、地域の産業界、教育界全体を巻き込んだ地域一体型のキャリア教育は実現した。

## たくさんの方の生き方を知る

取材当日は中学2年生を対象とした「職業講座」の開講日だった。地元の美容室、和菓子屋、製陶会社、酒屋、保育所、市役所などで働く（市民講師）が、学校の教室で、仕事の内容や工夫、苦労と喜び、子ども時代に好きだったこと、どうしてこの職業に就いたのかなどを、時にウィットを取り出して日本語を結んだり、和菓子を作ったりなど実演を交えながら話をする。今まで自分たちが何気なく暮らしていた社会を陰で支える、生身の大人との出会いの体験は、「働くこと」「つまりは「生きていくこと」を見つめる貴重な経



今回お話を伺った瀬戸商工会議所業務課・加藤滋樹さん。自身も瀬戸生まれ、瀬戸育ちという生粋の“せと者”だ。



美容師、和菓子職人、陶器絵付師、音楽療法士などの働く大人たちを“市民講師”として中学校の教室に迎え、話を聞く「職業講座」の風景。人生の先輩によるリアルティーのこもった経験談を聞きながら、仕事の喜びや苦勞を知る。また、“講師”の普段の仕事の手つきを目にすることで、それぞれの道のプロフェッショナルとして働くということの重みを感じることができる。



験となる。

「瀬戸市でも核家族化が進み、マンションが増え、子どもたちが家族以外の地域の大人と交流する機会は減っています。たくさんさんの大人と触れ合い、生き方を知

る。そんな出会いをできるだけ増やすことが、子どもたちの未来の選択肢を増やすことにつながると考えています」と加藤さん。今回訪れた中学校では、出会った生徒たち全員が、突然の見知らぬ来客である私たちを温かいあいさつで迎えてくれた。講座終了後、近付いてきて「大変そ

うで自分にできるかわからないけど、このお仕事やってみたいな」と感想を話してくれる生徒もいた。校舎だけでなく生徒自身の心も、知らない大人にごく自然に開かれているのが印象的だった。

## 山に木を植える漁師のように

「瀬戸キャリア教育事業」は今後も継続的に活動を行っていくために、国の委託事業としてではなく、組織面・経済面において自立化していくことを目指している。そのためにはより一層、企業理解を広げていくことが課題だ。

職場に子どもを受け入れたり、学校に出向いたりすることは、企業に少なからず負担を強いる。今回の市民講師の中にも、「子どものためだから今日は店を午前中で終わらせて来たんですよ」と笑いながら話してくれた人もいた。地域の大人たちを、こんなにも真剣に子どもの教育に向かわせる力は何なのだろう…と

考えていたら、加藤さんがこんな言葉を教えてくれた。

「漁師は海を豊かにするため、禿げ山に木を植え、50年後の森を夢見た――」

賢い漁師は、あえて自分の持ち場を離れて山に木を植えに行く。なぜならその行動はやがて美しい水をつくり、生命豊かな海を生み出すことにつながることを彼は卓見しているからである。

希望の持てる確かな未来、活気ある豊かな地域社会を実現するには、地域ブランドを作ったり、人を集める大規模なイベントを行ったりすることも一つの道だろう。しかし、真に豊かな社会を築くためには、まず何よりその社会を支える（人づくり）をしなければならぬ。子どもの教育の問題を、子どもやその親、学校だけの問題としてではなく、地域に生きる全員の問題としてとらえ、その課題解決に向けて積極的に手を差し伸べる瀬戸市の人々の姿は、山に木を植える「賢い漁師」と重なる。

目の前に見える、差し迫った問題だけでなく、視点を「今」よりも少し先にある「未来」へと合わせた上で、今、本当にするべきことは何かを知り、そのために行動を起こせる大人がどれだけいるか。それが、豊かな未来を築くための大きなカギとなるのではないだろうか。そんなことを考えさせられた一日だった。